



# 脳科学と仏教

*Science and Buddhism*

永田 円了

原人が四つん這いから立ち上がって（500万年前）、握ることのできる前足を手にしてから、人類は道具を使い、火を発見して現代に至った（科学）。ブッダは、その立ち上がった足を組み合わせて坐禅をし、その便利な手を合掌して心の尊さを発見したのである（仏教）。

要約すれば、科学は物の法則を発見し、宗教は心の法則を解いたと言える。今回のテーマは、物を対象にして発展した科学が、果たして物ではない心を説明できるのか。もっと言えば、物質として存在する脳が、なぜ目に見えない‘心’を生み出すことができるのか、という疑問を検証してみたい。

## 脳科学と仏教

脳科学はソクラテスの時代からずっと、永遠に変わらないものを対象に科学してきた（実体の存在論）。しかし、いま明らかになってきているのは、全てのもは移り変わる（プロセスの存在論）という仏教の考え方が、脳科学においても主流になっている（脳科学者・浅野孝雄）。

ブッダは、人間の存在を燃える炎のように、絶え間なく姿をかえる意識の流れとして捉えた。森羅万象、全てのもは変化する。永遠に存在するものはない。その変化の一瞬、一瞬を生きることが人生である、と仏教は捉える。

このことを、脳科学では「プロセスの存在論」と呼ぶ。この世に、永遠に変わらないものは何もない。起こることは、すべて変化（プロセス）。変化こそが存在するもの、と人生を再定義した。それは、“人間は必ず死ぬ”ということ一つをとっても分かることである。

「行く川の、流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」（鴨長明『方丈記』）は、文学的にも見事にこの仏教真理を物語っているのである。



## 認知症と仏教

高齢者の5人に1人がなるとされる認知症、今や国民病と言われる。今までできていたことが、だんだんとできなくなってゆく。過去の蓄積、大事な思い出などが薄れ、次第に空白になる。コンピュータのハードディスクが壊れ、それまでのデータがゼロになる。怖い。コンピュータなら、バックアップによって復元できるが、人間はそうはいかない。人の脳が、内蔵するハードディスク（記憶）を失ったとき、一体人間はどうなるのだろうか。

認知症の母親を介護する脳科学者の娘の、7年間の記録はなんとも心温まる事例である。（NHKスペシャル「認知症の母と脳科学者の私」）。「何でもやってあげるよ」が口癖だった母。火事、子育てを完璧なまでにこなしていた母親が、60代で認知症に。それまで発揮していた能力が、みるみるうちに無くなってゆく。何もできなくなったら、もう人間ではなくなるのだろうか、、、。最後に残るものとは。

### <事例 DVD等>

脳科学 vs. ブッダの世界観、NHK こころの時代 2024/10/5

「プロセスの存在論」（仏教）vs. 「実体の存在論」（科学）

仏教：人間には二つの苦しみがある／“身体の苦しみ” vs. “心の苦しみ”

サルは身体の苦しみを感じるが、心の苦しみを感じない（正高信男）

野球デッドボールの反応：清原選手のケース vs. イチロー選手

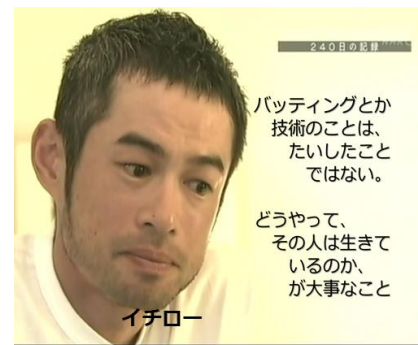
「自らを抛り所として生きなさい」（ブッダ最期の旅 第4章 15節）

NHKスペシャル「認知症の母と脳科学者の私」2023/1/17

NHKドキュメント20min. 「認知症さんぽ」2024/11/24

ジョセフ・キャンベル 人の内面にある「静かな場所」（ニルバーナ）

歌・沢田研二 1975年「時の過ぎゆくままに」日本歌謡大賞



円了のホームページ：[www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)